

「第１回手取川懇談会」の懇談結果（要旨） 平成１９年２月２日

○懇談会の内容

- １．開会挨拶（伊藤事務所長）
- ２．出席者紹介（小川副所長）
- ３．手取川水系河川整備計画の策定について
- ４．手取川懇談会の設立について
 - （１）手取川懇談会の設立趣意
 - （２）手取川懇談会規約（案）
- ５．懇談内容
 - （１）平成１８年７月豪雨による手取川出水状況
 - （２）手取川の河川整備の現状
- ６．閉会挨拶（伊藤事務所長）

○出席者名簿

◇出席者：２１名（敬称略・専門分野別五十音順）

氏 名	専門分野	所 属
玉井 信行	河川工学	金沢大学大学院 教授
辻本 哲郎	河川工学	名古屋大学大学院 教授
佐野 修	自然環境（魚介類）	石川県立自然史資料館
富樫 一次	自然環境（昆虫類）	石川県ふれあい昆虫館 前館長
中村 浩二	自然環境（生態学）	金沢大学自然計測応用研究センター 教授
野崎 英吉	自然環境（哺乳類）	石川県環境安全部自然保護課 課長補佐
古池 博	自然環境（植 物）	石川県地域植物研究会 会長
中川 耕二	地下水・地質	北陸地盤工学研究会 前会長
藤 則雄	地下水・地質	金沢学院大学美術文化学部 教授
村島 和男	農業土木	石川県立大学 教授
鹿島 博史	エネルギー	北陸電力(株)石川支店 技術部長
宮崎 光二	内水面漁業	石川県内水面漁場管理委員会 会長
池本 良子	水 質	金沢大学大学院 教授
永井 隆一	地域社会	石川県砂防協会前会長、旧白峰村長
西田 耕豊	地域社会	石川県治水協会会長、川北町長
山崎 正夫	地域社会	手取川流域開発期成同盟会前副会長、旧尾口村長
高澤 基	報 道	北國新聞社 代表取締役専務
長谷川孝徳	歴史・文化・文芸・教育	石川県立歴史博物館 学芸専門員
平野 俊也	歴史・文化・文芸・教育	水辺の楽校推進協議会委員長、能美市立寺井図書館長
三田 薫子	歴史・文化・文芸・教育	作 家
米田 満	歴史・文化・文芸・教育	白山地域自然保護懇話会 座長

◇欠席者

小堀 幸穂	地域経済	鶴来商工会 副会長
-------	------	-----------

○懇談要旨

(永井氏)

平成 18 年 7 月豪雨では、風嵐の蛇谷で本川まで流入する土石流が発生している。近年では、局地的な豪雨が多く各地で土石流が頻発しており住民としても憂慮している。国土交通省は、直轄管理区間だけではなく、手取川流域全域の災害の把握に努めて頂きたい。

(中川氏)

今後、懇談会を開催する際、全員で懇談していくのは難しい面もあるので、専門分野毎に開催し助言していく方法もあるのではないかと。

(中川氏)

平成 18 年 7 月出水で被災した能美市灯台^{とだしの}笹地先については、以前から砂州の樹林化により流向が左岸側となっているので水衝部となり被災したと思われる。植生や魚類などの生息環境のこともあり簡単ではないが、砂州の掘削等により流向を変えることも検討されてはどうか。

(玉井氏)

整備計画は手取川の自然条件として持っている特性をもとに作られたが、今後は、手取川の潜在能力を知った上で、手取川を管理していくことが望ましいのではないかと。

(佐野氏)

河川水の伏没還元に関する調査については、夏期にトミヨを観察していると生息箇所の湧水が河川水位の低下とともに減少していることが分かっているため、夏期の調査も実施していただきたい。

(藤氏)

以前に千里浜の海岸侵食について、石川県からの依頼により、手取川から羽咋にかけての海岸の砂を 3 年ほどかけて 200m 間隔で採取し粒径調査をした。その結果、海岸線を北上するに従って粒径が小さくなることがわかった。手取川の土砂供給の変化も影響していると考えているが、沿岸流による漂砂と関連した調査も行なって欲しい。

(藤氏)

「手取川水系河川整備計画」は非常によくまとまっているので、教材として流域の小中学校に配付していただけないか。

(高澤氏)

環境学習や防災教育も大事であるが、「ふるさと教育」も重要である。手取川、白山等の歴史を知ること、愛着が湧きそれにより手取川に対する思い入れが増し、結果として川を大事にしていくことに繋がっていく。

(三田氏)

子どもの防災意識を高めるために、見ているだけの体験ではなく、実際に川の中に入り、身をもって体験させるようなインパクトのあるものを考えたほうがよい。

また、手取川のダム建設や河川改修による安全性や利便性により住民への恩恵は多大だったと思われるので、近年悪く言われるダムについてもその効果について積極的にPRするべきである。

さらに、ダムの堆積土砂については、最新の技術なども考慮した再利用の方法を考えるべきである。

(平野氏)

手取川は流域圏の住民の共有財産であり、次の世代にどう伝えていけばよいのか考える必要がある。そういった意味で、辰口の水辺プラザのような施設のあり方や活用方法について具体的に考えていく必要がある。

(池本氏)

平成18年7月出水が利水や環境面にどのような影響があったか整理をしていただきたい。

(古池氏)

環境整備を進めていく上で、人工的にならないように配慮していただきたい。

(辻本氏)

本来、河川は施設を整備するだけでなく、直轄管理区間のみならず山から海まで平面的につながったマネジメントをしていくことが重要であるが、これまではそうではなかった。整備計画の性格上、施設中心の整備、直轄区間に限られた議論にまとめあげてきた。

そのため、この整備計画においても「施設だけでなくマネジメントも大事にしている、流域を意識している」という具体的なイメージが固まっていない。

今後は、施設整備とともにマネジメントをどうするかという議論を進めていかなければならない。例えば、治水については、堤防を作ることよりも想定氾濫区域図、ハザードマップを使って人を守ることや、ダムを作るのではなく、オペレーション自身が効果を上げるだろうというマネジメント。国の河川管理は、直轄管理区間だけでなく、地域の管理そのものであるわけで、お金を出して施設を作るというだけではなく、地方自治体へのアドバイス、情報提供、仕組み作りが重要である。

流域民への目配り、整備からマネジメントというところで手取川懇談会がフォローアップできる仕組みになればいい。